

卓 話

平成 15 年 7 月 15 日

『ガバナー補佐訪問』

ガバナー補佐 由良 久様

一 ガバナー補佐の任務について

クラブのみな様今日は。

A 分区のガバナー補佐を務めさせて頂いている岐阜クラブの由良久と申します。公式訪問前のクラブアッセンブリーのために訪問させていただいたところ、会長様から卓話の機会を頂きました。ガバナー補佐の任務の一つに、ガバナーの要請や提案を分区内クラブにお伝えしその実施を奨励するということがあります。卓話の機会に、ガバナーの本年度の方針をお伝えすることはそれなりに意味があると思います。勿論すぐに公式訪問がありますので、ガバナーはそのことをパワーポイント等のプレゼンテーション機器を使用してより要領よく申されと思いますが、予備知識を持っていたいただければご理解がよりよく得られると思いますので前座を勤めさせていただきます。



二 R I 会長テーマ、強調事項について

ガバナーは先ずジョナサン・マジアベ R I 会長のテーマと強調事項の実践を奨励されます。然し、各クラブがその実情に合ったように実践されればよい言うことで固苦しいことは仰いません。R I 会長のテーマは「手を貸そう」であります、「何に手を貸そうというのか」より具体的に強調されていること、即ち強調事項は、

1. ロータリー家族に対し
2. 識字率向上に対し、
3. 貧困の緩和撲滅に対し
4. 保健事情の遅れた地域に対し

それぞれ手を貸そうという事であります。

では、1の「ロータリー家族」とは何か。それは、配偶者、その他の家族、提携グループであるローターアクト、インターアクトの会員等であります。これに「手を貸そう」というのは、クラブが中核となって、これら家族の間に暖かい、思いやりのある雰囲気を育むということです。

どのようにしてか。かれらを、ロータリーの親睦行事、奉仕行事に参加させること等によってであります。更に、亡くなられた会員の配偶者等家族もロータリー後援の行事に招くことも提唱されています。このようなことが、退会防止、新会員の官有の手助けになるであろうと仰います。

ここで僅か30名余の可児クラブがザンビアへの救援物資を贈った事業を例に引きますと、それが可能になったのは各クラブの衣料等の収集活動への応援もさることながら、会員の家族、インターアクトかローターアクトの応援があったからです。そのために R I 会長は家族委員会を結成することを必須事項として要請しておられます。

さて、RI会長はナイジェリア出身で、貧困、飢餓、非衛生等、に苦しむ人々を間近にしておられるだけに、識字率向上、貧困、保健等に手を貸すことを強調されます。又それだけに説得力があります。世界にこのような富の不平等がなければトレードセンター等のテロもなかったでしょうし、戦争も回避できるのではないのでしょうか。

世界では、どのような現実があるか。これを外務省のホームページでみてみましょう。

「現在12億人の人々が1日1ドル以下の生活を強いられ、30億人近くの人が1日20ドル以下で暮らしている。1億1000万人の学童が学校に通っておらず、その60パーセントが女児が占める。3100万人がHIV/エイズに感染し、それを超える多くの人が十分な食事を与えられず不衛生な生活を強いられている」という状態です。我々ロータリアンが団結して現在ポリオを撲滅寸前に追い込んでいるように、次には手をつけるのはこれらのことであるというわけです。ガバナーは、クラブそれぞれの実情に応じてできる事は何か、できることからはじめてくださいというのがガバナーの意向であると思います。

会員の数の減少という問題はロータリーの活動に深刻な影響を与えます。然し、可児クラブの例もあります。頑張ってくださいというのがガバナーのお考えであります。例えば会員に先ほどのように後進国の実情を、画像等を駆使してアピールすることからはじめてくださいと仰っておられます。

三 ガバナー方針について

さて、伊達ガバナーは、今年がロータリーが創立されてからの100周年の最終の年である、ロータリー再生の年にしようということを強調され、年度方針として、

1. 原点に戻ろう
2. 理想のクラブを創ろう
3. 会長賞に挑戦しよう

を掲げておられます。

1, 原点に戻ろう

というのは、一度今までの計画を白紙に戻して見直そうということであり必要な事業は残し、既に実情に合わなくなった事業を廃し、その分、地域のニーズに合った事業を新しくはじめようということです。

2, 理想のクラブを創ろう

イ、 職業奉仕はロータリーの金看板

先ずロータリーが他のクラブと一線を画するのは職業奉仕である。会員に対する職業奉仕の精神の徹底を強調されます。先ず我々は自分の職業を「天職」と考えて、「世の為人のために尽くす」ことが職業奉仕の精神であると仰います。

ロ、 クラブを地域の小宇宙に

また、われわれの地域は分業で成り立っています。もし職業分類で地域の職業の種類のすべてを網羅すれば、そこにはその地域の小宇宙が出来はずです。(職業分類委員会)そのリーダーをすべてロータリーに入会させ、(会員選考、増強委員会)その人たちがすべて職業奉仕の精神を持っているとすれば、そのクラブは理想のクラブになります。理想のクラブを創るとはそういうことだとガバナーは仰います。

3, 会長賞に挑戦しよう。

会長賞の資格は、皆さまのクラブが

家族委員会を結成すること

「貧困緩和プロジェクト」に参加すること

クラブの選んだ奉仕活動を達成すること

であり、期間は2003年7月1日～2004年4月1日までに達成され申し込まれる必要があります。達成事項の数はこの分区のクラブの規模では、51名～150名の規模の場合は3プロジェクトで、50名以下の規模の場合は2プロジェクトでそれぞれ目標を達成されることです。それぞれのクラブがそれぞれの地域のニーズにあったプロジェクトを立上げ、会長賞に挑戦されることを奨励されています。以上でガバナーの要請提案等をお伝えしました。

四 IMについて。

私に与えられた任務には分区においてIMを主宰することがあります。今年は、既にご通知いたしましたように7月26日の合同例会の後引き続いてIMを開催し、童門冬二先生の講演「歴史に学ぶ商いの原点」を企画しております。RI会長のテーマ、強調事項、ガバナーの方針について分科会に分かれて討議を頂き、相互に会員の意識を高め合うことをも考えましたが、いろいろの意見が分散し、各総括者の個人的意見が表面に出てしまうとの批判もあり、方針を大転換して講演会にしました。童門先生に講師をお願いしたのは、先生の小説に「近江商人魂」というがあります。その中で、主人公の行商人が道中で盗賊に襲われ、ある禅僧に救われます。その際に行商人は禅僧に一生懸命努力して品物を売っておるのだが、誰も買ってくれない。とこぼします。これに対し禅僧は、お前にはホトケの心がないから売れないんだ、とさとしめます。そのホトケの心を禅僧は次のように説明します。「なによりも、どこの土地でもいいから、そこに住む人間が、何を欲しがっているかをつかむことだ。そしてその人間たちが欲しがる物がその土地になれば、あるところからその品物を持ってきてやれ。それがすなわちホトケの心だ」と。すなわち、禅僧は、行商という仕事に劣等感を抱いていた主人公にそれがホトケの心に合致する仕事であることを目覚めさせます。主人公は何か急にはじけたような思いがして目の前が明るくなります。すなわちガバナーが言われる天職（キリスト教の場合はこういう言葉になります。）に目覚めたのです。そして、それをもって世間の人のニーズに奉仕する気持ちを教わります。

ガバナーの言われるどんな職業も有用な仕事である限り貴賤はなく尊重されるべきであり、それに従事するものはそれを天職と心得て「世の為、人のために精を出す」ことすなわち職業奉仕の精神を禅僧から教わったのです。そして、その教えを原点とし、つらい行商の仕事に堪えて琵琶湖の鮎のように他国に飛び出して大きく育っていったのです。その根底には禅僧から教わった「どこかの見知らぬ誰かさんのために奉仕する」という職業奉仕の精神が根底にあったからです。私は、職業奉仕の精神こそ近代資本主義を内部からつき動かし発展させた原動力であったと思います。それは金銭欲ではなかったと思います。

西欧で職業奉仕の精神を信条とするプロテスタントが人口比率に占める割合が高いところほど資本主義が発展し、金銭欲では劣らなかつたその他の地域で資本主義が発展しなかつたことにそれが現れていると思います。（マックスウェーバーの説）

日本が封建主義から解放されてから、西洋の倍の速度で経済が発展したのも、日本の経済人の精神構造の根底に近江商人の精神（職業奉仕の精神）が流れていたからだとする童門先生のお考えに賛成します。その意味で、童門先生を講師としてお迎えして、「歴史に学ぶ商いの原点」をお聞きする企画をしたのです。どうかご出席をお願いします。